

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

El adulto usuario de L2:cognición bilingüe y aprendizaje

メタデータ	言語: spa 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1845

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文内容の要旨

Santiago Rodríguez de Lima

人間の頭の中でコントロールできる複数の言語間の関係、特に母語が第二言語に与える影響については、言語学の分野において長く研究されてきた。しかし、モノリンガル（生まれてから使用言語が一つのみの人）が大人になってから外国語を学んだ場合の外国語（これを第二言語と規定する）が母語に与える影響に関する研究は、ある程度新しいものであると言える。このような影響は **Retroactive influence** 「遡及的影響」と名付けられ、様々な実験的研究から、母語がさまざまな変化を受けているという明らかに名手来ている。

こんにち、情報技術の進歩により人間のコミュニケーションやデータや情報の伝達などが、数十年前では考えられない速度で可能になっている。そうした内容を受け取る側の全員の母語へ翻訳することは不可能であり、そのため「多言語使用」が特に新しい世代には求められるようになってきた。また、交通が発達し他の国への移動も簡単になってきたため、異文化交流が容易になっており、グローバル化が実現されつつある。そのため、現在は「多言語使用」は次第に希なことではない状態となっており、その現象を研究することはきわめて重要でと思われる。

V. Cook によって **1997** 年に **multicompetence**（多機能）の概念が紹介された。つまり、どんな言語を母語にするにせよ、多言語使用者の話し方はモノリンガルの話し方と異なる、という概念である。第二言語の能力があがると同時に自らの母語には変化が見えてくることを示す実験が存在する。**A. Pavlenko** によると、二つのロシア人のグループを作り、その実験データを比較研究した。一つはモノリンガルのグループで、もう一つは長くアメリカ合衆国で長く留学したマルチリンガルのグループだった。同じ動画を見せて説明するように指示すると、語彙だけではなく、シーンの説明をするときの視点や重点の置き方も異なった。もう一つ同様の実験として、**S. Jarvis** のものが挙げられる。氏によるとアメリカ合衆国で長い間生活していたフィンランド人の一人の人物のデータを数年間集めて分析すると、母語の感覚が同じ年の母語のモノリンガルのと様々な点において異なっていた。

この議論は更に広がりを見せて、マルチリンガル（一つ以上の言語を話す人）の概念が **1997** 年から **Imai & Gentner** によって進化された。つまり、この概念が言語の領域だけにとどまらない可能性を示唆したのである。この二人の研究者によれば、二つのモノリンガルのグループ（アメリカ人ネイティブの英語話者と日本人ネイティブの日本語話者）のデータが集められた。それを分析すると、具体的な物を認知する場合、英語話者が多くの場合で形によって分類したのに対し、日本語話者は多くの場合その物の素材によって分類を行ったことが明らかになった。

その後、**2006** 年に **V. Cook** とその研究チームは、英語を第二言語として使用する日本語ネイティブのマルチリンガルのグループを対象に同じ実験を行い、以前の結果と比較した。この実験の結果、マルチリンガルの概念はモノリンガルの概念とは根本的に異なることが明になった。つまり、マルチリンガルは単に「モノリンガル+L2」ではなく、新しい認知の類別になると結論づけた。外国語習得の影響のひとつとして、人間が現実を概念化する際、その方法が変わっていくことが考えられる。

その他にも、別のいくつかの研究チームが同じ実験を新たなモノリンガルのグループ（フランス語、スペイン語など、ただし英語も含む）とマルチリンガルのグループ（日本語ネイティブで、第二言語は英語、スペイン語など）を対象に行った。著者もその研究チームの中の一つに参加した。これらの実験の結果はすべて既存の結論を否定するものであり、更に **Cook** の結論を裏付け、遡及的影響が存在することが明らかになった。しかしこの現象における第二言語の役割が具体的な役割を果たしているという明白に言うことはできないが、現在のところ、その他のどの要素が関与しているかは明らかになっていないのが実情である。

本稿は前述の先行研究に基づき、日本語を母語とする多言語使用者である日本人大学生の母語使用を五年間観察した。

実験はマルチリンガルとモノリンガルの間にどのような違いが見られるかを観察する目的で、**2007** 年に開始された。

神戸市外国語大学（以降「神戸外大」）の全面的な協力により実験は行われた。被験者は二つのグ

グループに分けられた。一つはマルチリンガルであるイスパニア語学科四年生の学生たちで、もう一つはモノリンガルの国際関係学科四年生の学生たちだった。（本研究では、この場合「モノリンガル」とは外国語の専門的な知識をあまり持たず、その言語を専攻とする者よりは実践的にはあまり使用出来ない者であるとする。この大学の学生は入学試験で英語が必須な上、英語教育も行われているからである。

実験の結果、第二言語使用者の母語使用はモノリンガルの母語使用とある部分で違いが見られ、遡及的効果だと思われた。

次に、マルチリンガルの被験者の母語使用が、長く外国語を勉強する以前の段階ですでにモノリンガルの被験者の母語使用とは異なっていた可能性も考慮し、最初の実験の結果に見られた違いについてさらに別の実験を行い、詳しく調べた。

実験方法は最初のものとはほぼ同じであったが、今回の二つのグループの被験者もイスパニア学科の学生と国際関係学科の学生をであったが、今回は一年生を対象にした。

その結果、二つのグループの間に有意な違いは見られず、前回の実験結果に見られた違いは、マルチリンガルの第二言語の存在の影響によるものであるのではないかと考えられる。

こうして、遡及的影響を確実に調査し、実験する確固たる基盤を得たことになる。さらに詳しい研究を継続するために、新しい実験も取り入れた。以前の実験と類似の要素を使用すると、前回のデータと比べやすくなるので、これまでの継続性は維持しつつ、さらに、多種多様の母語の使用を発見するために作文と音声のテストに、複雑な問題を取り入れた。

また別の **Priming** と呼ばれる実験として、イスパニア学科の二年生から四年生までを対象にして、一学年を2グループに分けた。第二言語の影響が見るために、一学年の一つのグループだけにスペイン語の簡単なテストを行った。もし遡及的影響が実際に存在する現象であれば、つまり、外国語学習が短期で機能していたとしたら、同じレベルの能力の学習者の間にどのような違いが生じるのか、どのような点でどのような影響が見られるかが明らかになる。

この実験では、得た結果が以前の結果とほとんど同様であることが確認された。また、同時に、第二言語は多言語使用者日本人であるスペイン語専攻の大学生が使う母語に対してどのような影響を与えるのかに関する、さらに詳しいデータを得ることができた。

本論文は言語学の中で「多言語使用」に関する分野で大きな貢献を果たしていると考えられる。本稿で主張する説は、先行文献の少ない極めて新しい分野を切り開くものであり、第二言語が獲得される過程において母語との関連がより解明されることを目指すものである。